

# 高校体操競技選手の“あがり”について

## —技術水準に差異のある集団間の比較—

橋 口 泰 武 (日本大学理工学部)

### 目 的

スポーツ科学委員会ではスポーツ選手の“あがり”を「過度の興奮のために、予期した通りにプレーができず記録が低下した状態」と定義している<sup>1)</sup>。この“あがり”の実態を正確に把握し、その防止対策を講じることはスポーツ選手や指導者にとって重要な課題であろう。特に、体操競技等の個人的スポーツでは、試合直前の心理的コンディションが成績や記録を左右するといわれていることから、試合時での“あがり”の実態を調査し分析することは選手の心理的コンディション調整の一つの手懸りになるものと考えられる。

これまでの高校スポーツ選手を対象とした“あがり”の実態についての調査や報告<sup>3)～6)</sup>もなされているが高校体操競技選手を対象とした試合時での“あがり”の実態報告は少なく、従って高校体操競技選手の“あがり”の実態が正確に把握されているとは言い難い。

本研究でも高校体操競技選手の“あがり”の実態を把握し、その防止対策の基礎資料を得るために“あがり”意識の程度からその現象、原因の関係を分析した結果、“あがり”意識の程度によって現象や原因の選択率に差異のあることを指摘してきた<sup>7)</sup>。そこで今回は技術水準に差異のある集団間の“あがり”意識、自信や演技得点と“あがり”意識の関係、“あがり”現象、原因等について比較し分析を試みた。

### 研 究 方 法

#### 1) 対象と調査期間

調査期間は昭和57年4月～58年8月であり、昭和57年度の全国高校総合体育大会(以下インターハイ)出場の男子48、関東高等学校体操競技選手権大会(以下関東大会)出場の男子31、女子32、千葉県高校総合体育大会(以下県大会)出場の男子30、女子31、千葉県高校体操競技新人大会(以下新人大会)出場の男子31、女子26、県大会の都市地区予選会(以下地区大会)出場の男子56、女子60及び昭和58年度のインターハイ出場の女子31の合計376名の高校体操競技選手を対象とした。

但し、高校での体操競技では男子6種目(ゆか運動、あん馬、つり輪、跳馬、平行棒、鉄棒)、女子4種目(跳馬、段違平行棒、平均台、ゆか運動)が実施されている。今回は男女ともに、種目によって棄権した選手を除く全種目の実施者男子169名、女子158名の合計327名について分析を加えた。

#### 2) 技術水準による分類

調査した各種大会を技術水準(大会水準)によって次の3集団に分類し比較した。

ここでは、技術水準の下級(低)集団として県大会の予選会水準(地区大会)を1群、中級(中)集団として県大会水準(県大会及び新人大会)を2群、技術水準の上級(高)集団として県外大会水準(インターハイ及び関東大会)を3群とした。

#### 3) 調査方法及び内容

質問紙により、下記の調査項目について各種大会ごとに調査した。

- ① 体操競技の経験年数及び試合出場数を調査した。但し、試合出場数は高校での出場数である。

- ② “あがり”意識は試合全般及び種目ごとに調査した。“あがり”意識の程度は「全くあがらなかった(1点)」「少しあがった(2点)」「かなりあがった(3点)」の3点尺度である。
- ③ 自信は試合全般及び種目ごとに調査した。自信の程度は「非常に自信があった(5点)」「やや自信があった(4点)」「どちらともいえない(3点)」「やや自信がなかった(2点)」「非常に自信がなかった(1点)」の5点尺度である。
- ④ 演技ミスは種目ごとに調査した。演技ミスの程度は「なし(0点)」「1回(1点)」「2回(2点)」「3回(3点)」「4回(4点)」「5回以上(5点)」の6点尺度である。
- ⑤ “あがり”現象及び原因の項目は、坂入ら<sup>8)</sup>の研究結果から得られたものから体操競技に合致するよう検討を加え“あがり”現象及び原因の項目を決定した。いずれも複数回答である。
- ⑥ 演技得点は各種大会での公式の成績報告書によって調査した。

これらについて、地区大会と県大会は試合終了時に選手に質問紙を配布し回答させ当日回収した。関東大会、インターハイ、新人大会は試合終了時に各チームの監督者に選手への質問紙の配布を依頼し回答後郵送してもらう方法で回収した。

なお、現在の高校での体操競技では通常、規定演技と自由演技が行われているが、今回は各種大会で共通の演技内容及び採点規則で実施された規定演技での“あがり”について分析し比較した。

## 結果と考察

今回は大会水準によって選手の技術水準に差異があるものと判断して3つの群に分類し分析を試みた。しかし、技術水準の指標となる演技得点に明らかな差がなければ群間の技術水準に差異があるとは言えないであろう。そこで群間の演技得点に差があるかについて確めた。

表1 男女種目での演技得点の平均値(規定演技)

	1 群 (N=46)		2 群 (N=54)		3 群 (N=69)		P		
	M	SD	M	SD	M	SD	(群) 1と2	(群) 1と3	(群) 2と3
(男子)									
ゆか	6.784	1.545	7.696	1.231	8.956	0.469	**	***	***
あん馬	5.100	1.898	6.714	1.900	8.600	0.716	***	***	***
つり輪	5.586	1.826	6.544	1.585	8.657	0.695	**	***	***
跳馬	6.871	1.578	7.545	1.595	9.059	0.350	*	***	***
平行棒	5.357	1.773	6.881	1.782	8.776	0.490	***	***	***
鉄棒	5.411	2.371	6.977	2.012	8.913	0.686	***	***	***
	1 群 (N=49)		2 群 (N=51)		3 群 (N=58)		P		
(女子)	M	SD	M	SD	M	SD	(群) 1と2	(群) 1と3	(群) 2と3
跳馬	4.645	2.572	7.749	1.489	8.836	0.379	***	***	***
平行棒	4.465	2.117	7.001	1.886	8.835	0.510	***	***	***
平均台	5.656	1.765	8.044	1.011	8.605	0.565	***	***	***
ゆか	5.505	1.998	8.295	0.687	8.698	0.507	***	***	***

\*P<0.05 \*\*P<0.01 \*\*\*P<0.001

表1は男女種目での演技得点の平均値を群ごとに示したものである。男女の全種目ともに演技得点は1群～3群に移行するに従って高くなっていった。群間の平均値の差についてt検定で確認した結果、表1に示すとおりの有意水準で男女の全種目ともに群間の演技得点には明らかな差がみられた。演技得点からみる限り今回分類した3つの群は技術水準に差異がある集団であったと判断できよう。

1) 男女種目での“あがり”意識

表2 男女種目の“あがり”意識の得点平均値(規定演技)

	1 群 (N=46)		2 群 (N=54)		3 群 (N=69)		P		
	M	SD	M	SD	M	SD	(群) 1と2	(群) 1と3	(群) 2と3
(男子)									
ゆか	2.130	0.687	1.926	0.539	1.594	0.709		***	**
あん馬	1.935	0.742	2.056	0.621	2.188	0.687		+	
つり輪	1.652	0.674	1.889	0.629	1.725	0.700	+		
跳馬	1.696	0.726	1.574	0.564	1.420	0.575		*	
平行棒	1.957	0.631	2.185	0.617	2.029	0.538	+		
鉄棒	2.000	0.667	2.130	0.546	1.768	0.640		+	**
	1 群 (N=49)		2 群 (N=51)		3 群 (N=58)		P		
(女子)	M	SD	M	SD	M	SD	(群) 1と2	(群) 1と3	(群) 2と3
跳馬	(**) 2.000	0.707	(***) 1.784	0.642	(***) 1.466	0.537		***	**
平行棒	(***) 1.918	0.640	(***) 1.941	0.580	(***) 1.948	0.575			
平均台	2.408	0.705	2.549	0.610	2.345	0.515			+
ゆか	(*) 2.061	0.719	(***) 1.726	0.532	(***) 1.655	0.609	*	**	

+P<0.1 \*P<0.05 \*\*P<0.01 \*\*\*P<0.001

注・女子種目の平均値欄の( \*)は平均台とのt検定の有意水準を示す

表2は男女種目の“あがり”意識の得点平均値を群ごとに示したものである。

男子種目で“あがり”意識の得点平均値が各群内で最も高い種目をあげると、1群ではゆか運動、2群では平行棒、3群ではあん馬であった。逆に平均値が最も低い種目は1群ではつり輪、2群と3群では跳馬であった。女子種目でも平均値が最も低い種目は1群では段違平行棒、2群ではゆか運動、3群では跳馬となっており、群によって“あがり”意識の得点平均値の順位は異なっていた。しかし、女子種目の平均台は各群に共通して“あがり”意識の得点平均値は最も高くなっており他の種目に比べ一定した傾向がみられた。平均台と他の女子種目の平均値の差についてt検定した結果、いずれの群においても5%～0.1%水準で有意な差が認められた。すなわち、女子種目の平均台は技術水準に拘らず“あがり”意識の程度は強く、また他の種目に比べ“あがり”易い種目であるとも言えよう。このことは、高さ120cm、幅10cm、長さ5mの台上でゆか運動と類似した演技が要求される平均台の競技特性<sup>9)</sup>が起因しているものと考えられる。

また、男女ともにゆか運動と跳馬は1群～3群に移行するに従って“あがり”意識の得点平均値は低下する傾向が顕著であった。ゆか運動及び跳馬の群間の“あがり”意識の平均値についてt検定した結果、男子のゆか運動の1群と3群(P<0.001)、2群と3群(P<0.01)、跳馬の1群と3群(P<0.05)、女子のゆか運動の1群と2群(P<0.05)、1群と3群(P<0.01)、跳馬の1群と3群(P<0.001)、2

群と3群( $P < 0.01$ )に有意な差が認められた。すなわち、男女ともにゆか運動と跳馬は技術水準が低い集団の方が“あがり”意識の程度が強い種目であるとも言えよう。しかし、男子のあん馬は1群～3群へ移行するに従って“あがり”意識の得点平均値が高くなっていた。あん馬の群間の平均値の差についてt検定した結果、1群と3群に有意差( $P < 0.1$ )は認められなかったが、ゆか運動や跳馬とは逆に技術水準の高い集団で“あがり”意識の程度が強くなる傾向がみられた。すなわち技術水準によって体操競技種目の“あがり”意識には差異がみられた。このことは体操競技種目の競技特性<sup>10)</sup>によって、各種目の難易度や各種目に対する個人の習熟度等の相違が起因しているのではないと思われる。

## 2) 演技に対する自信と“あがり”意識

表3 男女種目の演技に対する自信と“あがり”意識の相関値  
(規定演技)

(男子)	1群(N=46)	2群(N=54)	3群(N=69)
ゆか	-0.374 <sup>*</sup>	-0.301 <sup>*</sup>	-0.457 <sup>***</sup>
あん馬	-0.065 <sup>**</sup>	0.090	-0.554 <sup>***</sup>
つり輪	-0.407 <sup>**</sup>	-0.085	-0.260 <sup>*</sup>
跳馬	-0.526 <sup>***</sup>	-0.191 <sup>+</sup>	-0.281 <sup>*</sup>
平行棒	-0.038	-0.271 <sup>+</sup>	-0.321 <sup>*</sup>
鉄棒	-0.304 <sup>*</sup>	-0.113	-0.275 <sup>*</sup>
(女子)	1群(N=49)	2群(N=54)	3群(N=58)
跳馬	-0.193	-0.321 <sup>*</sup>	-0.406 <sup>**</sup>
平行棒	-0.160	0.086 <sup>**</sup>	-0.535 <sup>***</sup>
平均台	-0.022	-0.507 <sup>***</sup>	-0.459 <sup>***</sup>
ゆか	-0.277 <sup>+</sup>	-0.424 <sup>**</sup>	-0.618 <sup>***</sup>

+  $P < 0.1$  \*  $P < 0.05$  \*\*  $P < 0.01$  \*\*\*  $P < 0.001$

表3は男女種目での演技に対する自信の程度と“あがり”意識の程度との相関係数を群ごとに示したものである。

男子では1群のゆか運動( $P < 0.05$ )、つり輪( $P < 0.01$ )、跳馬( $P < 0.001$ )、鉄棒( $P < 0.05$ )、2群のゆか運動( $P < 0.05$ )、3群のゆか運動( $P < 0.001$ )、あん馬( $P < 0.001$ )、つり輪( $P < 0.05$ )、跳馬( $P < 0.05$ )、平行棒( $P < 0.05$ )、鉄棒( $P < 0.05$ )に有意な負の相関が認められた。女子では2群の跳馬( $P < 0.05$ )、平均台( $P < 0.001$ )、ゆか運動( $P < 0.01$ )、3群の跳馬( $P < 0.01$ )、段違平行棒( $P < 0.001$ )、

平均台( $P < 0.001$ )、ゆか運動( $P < 0.001$ )に有意な相関が認められた。特に男女ともに3群では男子6種目、女子4種の総てに有意な相関が認められた。すなわち技術水準の高い集団(3群)では種目に拘らず、自信の程度が低い方が“あがり”意識の程度が強い傾向が顕著であった。

図1は男子種目での自信の程度(①自信あり、②どちらとも ③自信なし)による“あがり”意識の平均値を示したものである。

自信の程度は「自信あり(やや及び非常にあった)」、「どちらとも」、「自信なし(やや及び非常になかった)」にまとめて集計したものである。

一般的にみると「自信あり」に比べ「自信なし」の方が“あがり”意識の得点平均値が高い傾向がみられた。その傾向は3群に顕著であった。3群では全種目に共通して自信の程度が「自信あり」～「自信なし」へ移行するに従って“あがり”意識の得点平均値は高くなるという一定した傾向が顕著であった。すなわち技術水準の高い3群では全種目に、自信のないものの方が“あがり”意識は強いという傾向がみられたとも言えよう。しかし、1群や2群では種目によって自信の程度と“あがり”意識との関係は異なっており、3群のような一定した傾向はみられなかった。特に2群のあん馬では「自信なし」よりも「どちらとも」の方が“あがり”意識の得点平均値が高い傾向( $P < 0.1$ )もみられ必ずしも「自

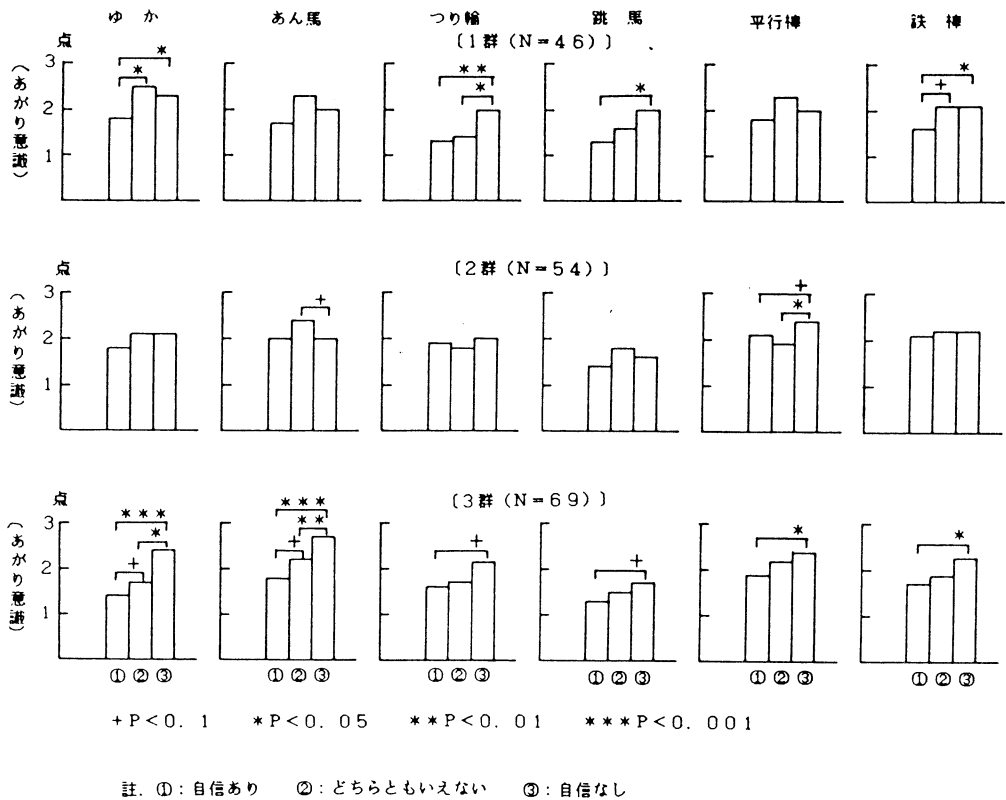


図1 自信の程度からみた男子選手の“あがり”意識の比較（規定演技）

信なし」の方が“あがり”意識が強いとは言えない傾向も示された。

従来から“あがり”を防ぐには「経験や修養によって自信をもつこと」<sup>11)</sup>とのべられていることなど“あがり”と自信との関係が指摘されている。今回の分析結果からも自信をもって試合に臨んでいるものの方が“あがり”意識が弱い傾向がみられ、高校体操競技選手でも自信の有無と“あがり”意識の強弱にはかなりの関係が示された。特にその傾向は演技得点の偏差が小さく（表1）実力の接近している技術水準の高い集団（3群）で顕著であった。このことから技術水準の高い競技会ではいかにして自信をもって競技に臨むことができるかが選手や指導者の“あがり”対策として重要な課題であるものと考えられる。しかし、今回の分析結果において、1群や2群の男子のあん馬や女子の段違平行棒では自信と“あがり”意識との関係はみられなかった。松田は「自信のないものに“あがる”ものが多いが、それだけが原因でなく他の条件も働いている（筆者中略）。すなわち、自信をもって試合に臨んでいるものでも“あがる”と訴えている」と報告している。このことから高校体操競技での自信についてのより詳細な分析の必要性が示唆された。

#### 4) 演技得点と“あがり”意識

男女種目の演技得点と“あがり”意識の程度との相関を求めた。その結果、男子の3群の6種目中ゆか運動 (P<0.05)、あん馬 (P<0.1)、跳馬 (P<0.1)、鉄棒 (P<0.01) の4種目に有意又はその傾向を示す負の相関が得られた。しかし、1群や2群では有意な相関は得られなかった。すなわち技術水

準の高い集団（3群）では演技得点の低いものの方が演技得点が高いものに比べ“あがり”意識が強い傾向がうかがえた。しかし、技術水準の低い集団では演技得点と“あがり”意識には一定した傾向はみられなかった。また、女子では2群の跳馬（ $P<0.05$ ）に負の相関が得られただけであり、1群と3群では全く有意な相関は得られなかった。

図2は男子種目での演技得点の程度（①高得点、②平均得点、③低得点）による“あがり”意識の平均値を群ごとに示したものである。

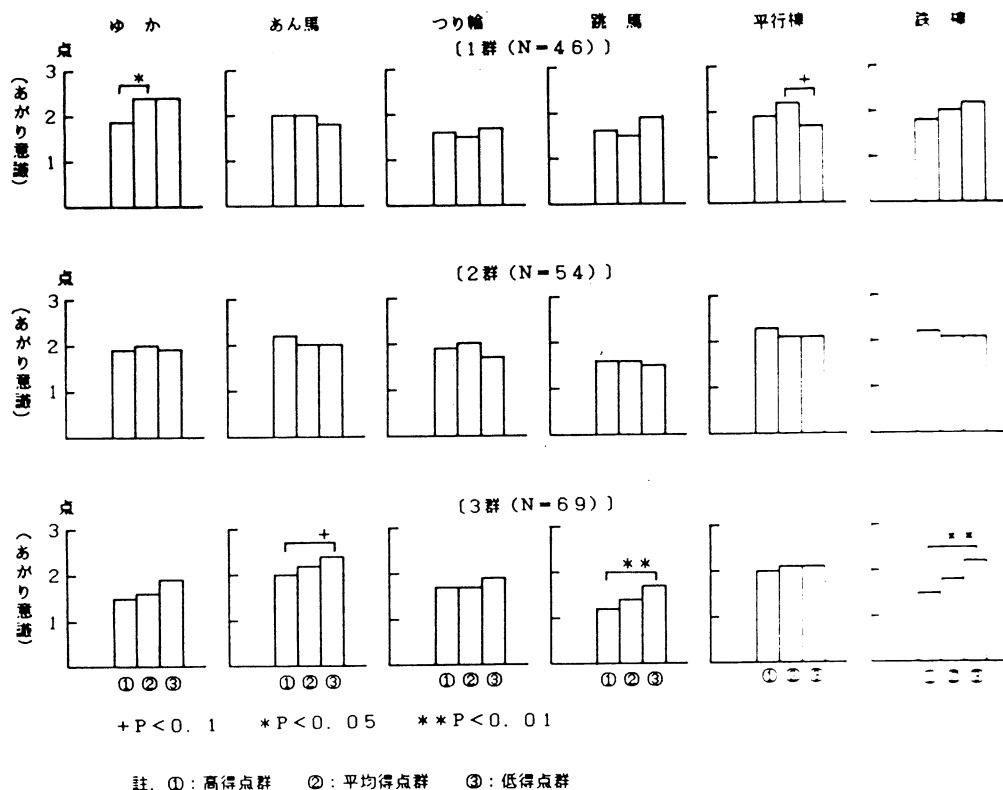


図2 演技得点の程度からみた男子選手の“あがり”意識の比較（規定種目）

今回の演技得点の程度のカテゴリは、各群の種目ごとに平均値を基にして①高得点群、②平均得点群、③低得点群とした。

図2に示すように、3群では全種目に共通して高得点群に比べ低得点群の方が“あがり”意識の得点平均値が高くなっており一定した傾向がみられた。3群の高得点群と低得点群間の“あがり”意識の得点平均値についてt検定した結果、あん馬（ $P<0.1$ ）、跳馬（ $P<0.01$ ）、鉄棒（ $P<0.01$ ）に有意な差はその傾向を示す差がみられた。すなわち技術水準の高い3群では各種目ともに演技得点の平均以下（低得点群）のものの方が“あがり”意識の程度が強い傾向が示された。特に跳馬と鉄棒で顕著であった。このことは選手の実力（演技力）が高いと“あがり”意識を抑えることが可能とも思えてきよう。しかし、1群や2群では図に示すように演技得点の程度による“あがり”意識の関係は種目によって異なっており、3群のような一定した傾向はみられなかった。特に1群の平行棒では低得点群より高得点群や平均

「胃が痛くなる」は3群だけに選択されていた。

また、3群に比べ1群や2群で比率が高くなっている項目をみると、男子では「落ち着きがなくなった」「集中力に欠けた」「不安感に陥った」「身体が重く感じた」「身体がだるい」等であった。特に「身体が重く感じた」は1群で29.5%、2群で19.2%、3群で3.3%となっておりその差が顕著であった。女子では「思考の混乱」「時間が長く感じる」「集中力に欠けた」「不安感に陥った」「身体が震えた」「身体がだるい」「唇がかわいた」等であった。特に「思考の混乱」は1群24.4%、2群6.5%、3群3.5%となっており、1群と3群でその差が大きい。男女ともに技術水準の低い1群では男子の「身体が重く感じた」「身体がだるい」等、女子の「思考の混乱」等どちらかと言えば体操競技のパフォーマンスに好ましくない影響を及ぼすのではないかとと思われる“あがり”現象項目の選択率が3群に比べ高くなっている傾向がみられた。

表4は男女選手の“あがり”現象項目の訴え数の平均値を群ごとに示したものである。

男女ともに“あがり”現象項目の訴え数の平均値は1群～3群へ移行するに従って低くなっていた。群間の訴え数の平均値の差についてt検定した結果、男子の1群と3群( $P<0.01$ )、2群と3群( $P<0.05$ )、女子の1群と2群( $P<0.1$ )、1群と3群( $P<0.01$ )に有意又はその傾向を示す差が認められた。すなわち男女ともに技術水準の高い集団の選手に比べ技術水準の低い集団の選手の方が多くの“あがり”現象項目を自覚していたと言えよう。

#### 6) 男女選手の“あがり”原因

図4は男女選手の“あがり”原因項目の選択率を群ごとに比較したものである。

図4に示すように“あがり”原因項目の選択率は男女にはほぼ共通した傾向がみられた。男女ともに1群や2群では「不安感」「自信

表4 男女選手の“あがり”現象の訴え数の平均値(規定演技)

	男子選手			女子選手		
	N	M	SD	N	M	SD
1群	44	3.977	1.947	45	3.622	1.992
2群	52	3.692	2.263	49	3.184	1.667
3群	60	2.833	1.531	57	2.614	2.111

有意水準 1群と3群  $P<0.01$

1群と2群  $P<0.1$

2群と3群  $P<0.05$

1群と3群  $P<0.01$

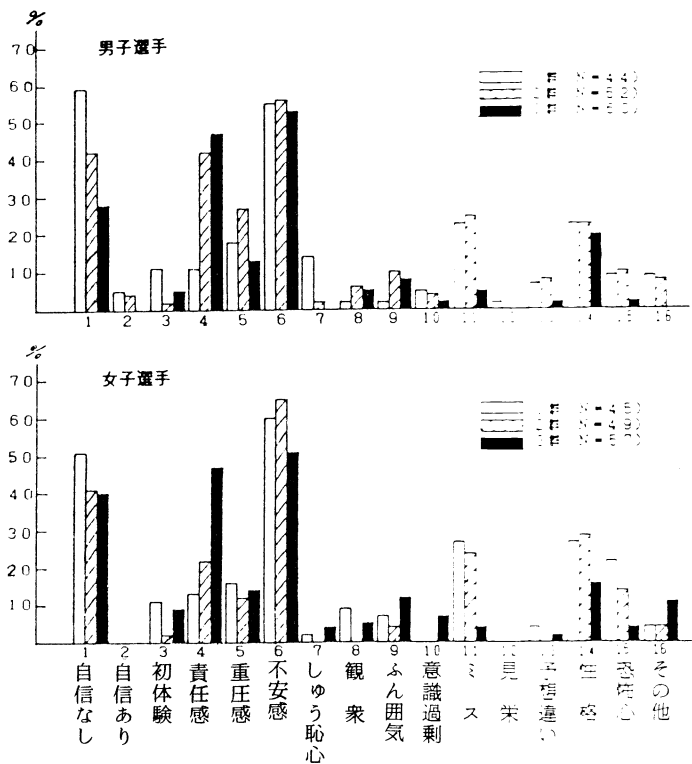


図4 男女選手の“あがり”原因の比較(規定演技)

得点群で“あがり”意識の得点平均値が高くなっていた。t検定の結果、低得点群と平均得点群間に有意差 ( $P < 0.1$ ) は認められなかったが傾向が示された。このように演技得点と“あがり”意識との関係には技術水準や種目によって差異がみられた。このことは成瀬が「要求水準が実力に対して妥当なところに落ちつかせるのが容易でない」と指摘するように、選手の要求水準と実力とのギャップなどが一つの要因となっているのではないと思われる。

### 5) 男女選手の“あがり”現象

図3は男女選手の“あがり”現象の選択率を群ごとに比較したものである。

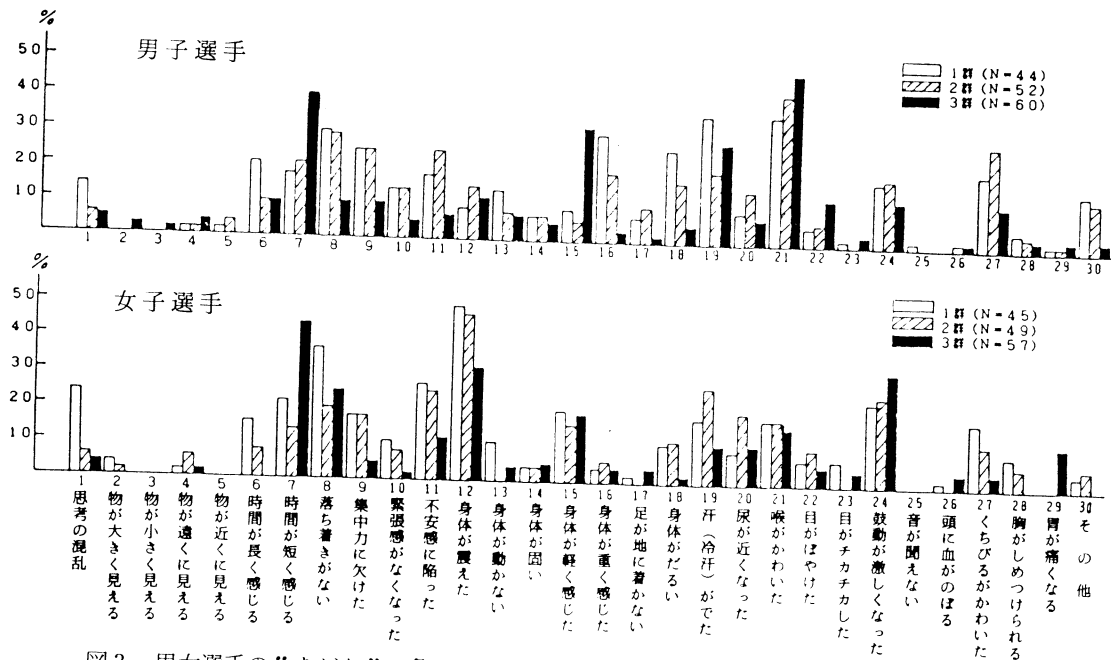


図3 男女選手の“あがり”現象の比較(規定演技)

男子の“あがり”現象項目は群間によって項目の選択率は異なっているが、生理的現象と思われる「喉がかわいた」は1群(36.4%)、2群(42.3%)、3群(48.3%)に共通して高い比率で選択されていた。

女子の“あがり”現象項目も男子と同様に群間によって選択率は異なっているが、身体的現象と思われる「身体が震えた」は1群(48.9%)、2群(46.9%)、3群(31.6%)に共通して高い比率で選択されていた。

すなわち技術水準に拘りなく各群に共通して男子では「喉がかわいた」、女子では「身体が震えた」が“あがり”現象項目として高い比率で選択されていることから、これらの項目が体操競技での男女選手の“あがり”現象の特徴を示すものではないかと思われる。

次に男女の“あがり”現象項目で1群や2群に比べ3群で比率が高くなった項目をみると、男子では「時間が短く感じる」「身体が軽く感じた」「喉がかわいた」等であった。特に、身体的な現象と思われる「身体が軽く感じた」は1群で9.1%、2群で5.9%、3群で3.17%となっておりその差が顕著であった。女子では「時間が短く感じる」「鼓動が激しくなった」「胃が痛くなる」等であった。特に



なし」「ミス」「性格」等であり、3群では「不安感」「責任感」「自信なし」等が高い比率で選択されていた。特に「不安感」は技術水準に拘りなく、男子の1群(54.5%)、2群(55.8%)、3群(53.3%)、女子の1群(60.0%)、2群(65.3%)、3群(50.9%)に共通して高い比率で選択されていた。

14) 松田は「不安傾向は緊張に置きかえられるであろう。そしてこの問題は、いわゆる“あがり”の問題である」と指摘している。今回の分析結果でも「不安感」は“あがり”原因項目として技術水準に拘りなく高い比率で選択されており、体操競技における「不安」の内容を分析することは体操競技での“あがり”を解明するための重要な手懸りとなろう。

また、“あがり”原因項目で1群や2群に比べ3群で選択率が高くなっている項目は男女に共通して「責任感」であった。特に女子では1群(13.3%)、2群(22.4%)、3群(45.6%)と技術水準が高くなるに従って選択率も高くなっていた。このことは学校や地域の代表選手であることに対する周囲の期待等が技術水準が高くなるに従って大きくなることも考えられ、選手の「責任感」の程度に影響を及ぼしているのではないかと思われる。

また、3群に比べ技術水準の低い1群や2群で選択率が高くなっている“あがり”原因項目は男女ともに「自信なし」「ミス」等であった。特に男子の「自信なし」は3群(28.3%)、2群(42.3%)、1群(59.1%)と技術水準が低下するに従って“あがり”原因項目として選択するものが多くなっていた。

表5は男女選手の“あがり”原因項目の訴え数の平均値を群ごとに示したものである。

男女ともに“あがり”原因項目の訴え数の平均値は3群に比べ技術水準の低い1群や2群で高い傾向がみられた。群間の訴え数の平均値の差についてt検定した結果、男子の1群と3群( $P<0.05$ )、2群と3群( $P<0.001$ )、女子の1群と2群( $P<0.05$ )、1群と3群( $P<0.05$ )に有意な差が認められた。すなわち男女ともに技術水準の高い集団(3群)に比べ技術水準の低い集団(1群)の選手の方が多くの“あがり”原因を訴えていたと言えよう。

表5 男女選手の“あがり”原因の訴え数の平均値(規定演技)

	男子選手			女子選手		
	N	M	SD	N	M	SD
1群	44	2.546	1.284	45	2.756	1.171
2群	52	2.693	1.164	49	2.265	1.114
3群	60	1.933	1.072	57	2.228	1.268
有意水準	1群と3群 $P<0.05$			1群と2群 $P<0.05$		
	2群と3群 $P<0.001$			1群と3群 $P<0.05$		

## まとめ

高校体操競技選手の“あがり”の実態を把握するために、技術水準に差異のある集団間の“あがり”意識、自信や演技得点と“あがり”意識との関係、“あがり”現象及び原因等について分析した結果、次のことが指摘できよう。

- 1) 技術水準によって男女種目の“あがり”意識に差異がみられた。男女のゆか運動と跳馬は技術水準の高い3群に比べ技術水準の低い1群で“あがり”意識が強くなっていた。また、女子の平均台は技術水準に拘りなく“あがり”意識は強くなっていた。
- 2) 技術水準の高い3群では男女の全種目で自信がないものの方が“あがり”意識が強い傾向が顕著であ

った。

- 3) 技術水準の高い男子の3群では演技得点が低いものの方が“あがり”意識が強い傾向がみられた。1群や2群では種目によって異なり一定した傾向はみられなかった。
- 4) 技術水準によって“あがり”現象項目の選択率には差異がみられた。また、技術水準の高い3群に比べ技術水準の低い1群の選手の方が多くの“あがり”現象を自覚していた。
- 5) 技術水準によって“あがり”原因項目の選択率には差異がみられた。また、技術水準の高い3群に比べ技術水準の低い1群の選手の方が多くの“あがり”原因を訴えていた。

#### 引用参考文献

- 1) スポーツ科学研究委員会心理部会：心理部会報告、東京オリンピックスポーツ科学委員会報告、日本体育協会、1965.
- 2) 猪俣公宏：I型競技の心理学、日本体育協会監修、コーチのための人間学、大修館、P.154、1981.
- 3) 荒川由美子他：試合や競技における“あがり”について、日本体育学会第25回大会号P.273、1974.
- 4) 井谷義昭他：高校運動選手の“あがり”について、体育学研究、Vol.9、No.1、P.422、1964.
- 5) 松田岩男：運動選手の性格特性と“あがり”に関する研究、体育学研究、Vol.6、No.1、P.355、1971.
- 6) 岡村豊太郎：T型競技の心理学、日本体育協会監修、コーチのための人間学、大修館、P.154、1981.
- 7) 橋口泰武他：“あがり”に関する研究5、日本体育学会第35回大会号、1984、11.
- 8) 坂入保世他：いわゆる“あがり”現象に関する体育心理学的研究第2報、日本心理学部第11回学術講演会一般教育部会講演概要、1978、10.
- 9) 日本体操協会女子競技本部：採点規則、女子、日本体操協会、1985.
- 10) 日本体操協会男子競技本部：採点規則、男子、日本体操協会、1985.
- 11) 松井三雄：体育心理学、体育の科学社、P192～193、1968.
- 12) 松田岩男：運動選手の性格特性と“あがり”に関する研究、体育学研究Vol.6、No.1、P357、1961.
- 13) 成瀬悟策：あがりと要求水準、関計夫編 要求水準の研究、金子書房、P261～265、1980.
- 14) 松田岩男他：スポーツ心理学概論、日本スポーツ心理学会編、不味堂出版、P224～225、1981.

(昭和57年10月20日受付)